

31. 日本語拗音の知覚と読みに関する発達的研究

○渡邊理恵¹⁾ 飯高京子¹⁾ 岡崎恵子¹⁾

大石敬子¹⁾ 荒井隆行²⁾

¹⁾上智大学言語障害研究センター

²⁾上智大学電気電子工学科

【目的】 仮名文字は基本的に1文字1音対応で読み書きの習得が比較的容易である。しかし特殊音節拗音は2文字で1音を表す音の混成が必要で音節構造についての明確な認識が必要とされる。本研究では拗音の知覚、読み、音韻認識についての実験を行い、健常児が拗音をどのようにとらえているかについて発達的に検証した。

【対象】 健常発達の年中・年長児、小学1・2年生、各学年30人、計120人、成人30人(拗音同定実験のみ)。

【方法】 ①拗音同定実験：2音節[kija]の母音[i]の長さを段階的削除で加工した10種類の刺激音の同定実験。②拗音の読み課題：10種類の拗音単音節の読み課題。③拗音単語判断課題：拗音を逐次的に発音した単語を聴覚呈示し、その正誤判断を求めた。また誤りの場所とその理由を言語化させた。

【結果】 ①拗音/非拗音に関する小児の同定境界は、成人の境界よりも母音の長さが短いほうにずれた。加齢に伴い成人の同定境界に近づいた。②正答数は加齢に伴い増加し課題語の頻度効果は認められなかった。③聴覚呈示された単語内拗音の誤りに気づくことは年齢に関係なく9割以上が可能であった。誤りの場所の特定と文字を表象した表現は、学童では就学前児に比べ有意に増加した。

【考察】 年齢が低いほど非拗音に同定する率が高く拗音同定率も加齢に伴い増加した。就学前児では、拗音同定が成人に近いほど読みの成績がよく、同定した音韻表象が読みの学習を支える1要因と考えられた。読みの正答率の分布と誤答は拗音読み規則の習得程度を表し、幼児は限られた知識を使って拗音の推測読みをしているのではないかと考えられた。単語判断課題では、学童が音声を文字列に変換することによって音韻認識を高めることができたとすれば、組織的文字学習導入前の幼児ではこの作用がなかったために単語内の拗音を分解・抽出することが難しかったと考えられた。